
静暗館へようこそ

ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静暗館へようこそ

【Nコード】

N6224E

【作者名】

ヒイロ

【あらすじ】

警察、弁護士、法律。全て通じない悪人に毎日苦しみ続ける人々が行き着く先は謎の一室「静暗館」。そこでは一人の美少女、宮村雪が助けを請う人々と取引を行っていた。彼女は以来内容と釣り合う条件を要求し、裁きの秘宝と呼ばれる四つの武具を駆使して悪の大小問わず悪人を裁いた。石山稔はそんな彼女と出会い、人間の深く暗い闇の部分を知る。稔は闇を断ち切りその先にある光の世界を手に入れたと言う宮村の願いに協力し、普通だった高校生活からかけ離れたミステリアスな世界に足を踏み入れたのだった。

エピソード

一つの噂は水面に落ちた一滴の雫のように円を描き、広がっていく。それは広がるにつれ正確さを失い変形していく。そして、水面へと消えていく。

「なあ、2組の宮村って中学の時に番長だったらしいぜ。」
「らしいな。噂によると街の不良どもを片っ端から潰してたんだって。」

県立桜ヶ丘高校に入学して二ヶ月が過ぎた頃、この噂を知らない一年はモグリと呼ばれるほどに広まっていた。

一年二組の宮村。こいつは中学時代に相当の悪で不良狩りを毎日楽しんでいた危険人物と言われている。

しかしその噂はどこから発祥したのかも分からない正確さに欠けた話し。冷静に考えれば高校に慣れてきた一年の暇つぶしのための馬鹿げた話しだと猿でもわかる。

何せ宮村は学年一の、いや学校一の美少女だからさ。

肩まで伸びた綺麗な黒のストレート髪に、パツチリとした目。端正な顔立ちを持った色の白い華奢な体型をしている。

無口な正確にこの噂が手伝ってか、周りに会話相手もおらずいつも一人で分厚い本を読んでいる。

そんな奴が番長な訳があるはずも無い。

俺はこんな噂を全く信じていない。そんな馬鹿げた話しをする暇があれば英語の予習でもしている方がまだマシだ。

そんなシケた事を考えて机に突っ伏して寝ている俺の所にいつものように奴が来るのさ。

「おい石山お前だけだぞ、この噂に関心ないのは。そんなに信じないなら一回本人に聞いてみてくれよ。」

俺の安眠をいつも阻止するのはクラス一お調子者の安藤登だ。高校

で知り合った友人の内の一人だが、性格が明るくいつも馬鹿な事をやっている面白い奴だ。

こいつも噂に喰いついて放そうとしない馬鹿犬の一人である。

そろそろこの噂話にも飽きたし何より宮村がかわいそうなので、俺は突っ伏した身体をバネのように勢いよく飛び起こし、

「しゃーねーな。俺が聞いてきてやるよ。その代わり昼飯の焼きそばパン奢れよ。」

と、最後の俺の一言をもみ消そうと言葉を選び口をパクパクさせている安藤を背にし、同じクラスで窓際最後尾という特等席を支配する宮村のもとへ俺は足を運んだ。

全てはここから始まったのだ。俺と宮村雪との闇の向こうにある光で満ちた世界を探す日々が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6224e/>

静暗館へようこそ

2010年11月26日13時43分発行